



TITLE:

前線兵士の沈黙と虚構の要請 -第一次世界大戦における前線兵士の語りとエルンスト・ユンガーの『鋼鉄の嵐のなかで』 -

AUTHOR(S):

稲葉, 瑛志

CITATION:

稲葉, 瑛志. 前線兵士の沈黙と虚構の要請 -第一次世界大戦における前線兵士の語りとエルンスト・ユンガーの『鋼鉄の嵐のなかで』 -. 文明構造論: 京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 2014, 10: 141-179

ISSUE DATE:

2014-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/191198>

RIGHT:

前線兵士の沈黙と虚構の要請
——第一次世界大戦における前線兵士の語りとエルンスト・ユンガーの
『鋼鉄の嵐のなかで』——

稲 葉 瑛 志

はじめに

第一次世界大戦はそれを体験した者に深い傷痕をのこした。モッセによると、「組織化された大量死というものに初めて真正面から出会った」¹ こと、これが第一次世界大戦を目撃した者の根源的体験であった。そして、その政治的帰結としてドイツを待ち受けていたのは、大戦の敗北と帝政の崩壊であった。政治という大きなパースペクティブで見れば、第一次世界大戦によって音をたて崩れ去ったのは、なによりもこうした体制のことを意味するだろう。それでは、想像を絶する「組織化された大量死」に直面せざるをえなかった前線兵士たちは、何が決定的に崩壊したと感じていたのであろうか。西部戦線で野戦砲兵として従軍したカール・ツックマイヤーは、第一次世界大戦をふりかえって次のように述べた。

わたしは、戦争にかんする本を書いたことはなかったし、戦争の話を語ったこともなかった。戦争について伝達することは不可能のように思われた。理想的、英雄的、批判的なひかりに灯して体験したことを現実として再現することも、あるいは事実 に即して戦争体験を報告することさえも無駄のように思われた。²

このツックマイヤーの告白は、広義に解釈すれば、いかなるイメージも戦争の暴力や残

¹ Mosse, George L.: *Fallen Soldiers. Reshaping the Memory of the World Wars*. Oxford 1990, P. 3.

² Zuckmayer, Carl: *Als wär's ein Stück von mir. Horen der Freundschaft*. Wien 1966, S. 213.

酷さを余すところなく伝えることは不可能であるということであろう。しかし、この発言の歴史的文脈を考慮すると、ツックマイヤーは第一次世界大戦を分岐点として戦争体験を他者に伝えることが不可能になったと述べていることがわかる。体験は他者に伝えることができる、これが日常的な理解であろう。しかしながら、ツックマイヤーを含めた第一次世界大戦の前線兵士たちにとっては、この一般的な理解がまるで嘘偽りのように思われたのである。本稿ではまずこうした前線兵士の沈黙を主要な論点にすえて考察をおこなう。こうした戦争体験を伝えることの不可能性を感じた前線兵士の心性を明らかにするには、第一次世界大戦の政治史、軍事史、外交史を軸に展開される論では十分だといわざるをえない。そこで本稿では、戦争体験者の心性を理解するために、戦没兵士の手紙、銃後の言説、虚構の文学といったドイツの第一次世界大戦の記憶文化を構成してきたメディアから当時の人々が抱いた戦争体験の様々なイメージを抽出する。その際、みいだされた多様なイメージを散りばめるのではなく、前線と銃後との戦争体験の語られ方の相違を明確にしたうえで、双方にみられる戦争体験のイメージの対立構造を明らかにする。語りたくもないトラウマとなった戦争体験について思いだそうとすれば、一人の兵士という個人のレベルでも社会のレベルでも、それを抑圧しようとする力がはたらく。また、証言者がトラウマとなった体験を語りだすとなると、その語りの真偽をめぐる政治的な権力闘争がおこなわれる。まさにこの事態が本稿で扱うヴァイマル末期の戦争文学の言論状況である。しかしながら、生還した前線兵士が文学という形式をかりて自らの戦争体験を語る試みは、単なるイデオロギーの問題に還元されるべきではない。およそ戦争のイメージとは、あらかじめ固定されたものでは決してなく、戦争体験者が語ることを通じて従来の言説がつくりあげたイメージを破壊しながら再び構築するものである。本稿で扱う前線兵士の語り、とりわけエルンスト・ユンガーの『鋼鉄の嵐のなかで』の語りには、「親世代」の言説にも軍事史にも語られることのない＜別の体験としての戦争＞の諸相が描かれている。以下ではまず、前線兵士の手紙を手がかりに「親世代」の言説を分析し、前線兵士たちの手紙からみえる「親世代」の言語体系への幻滅と、自らの戦争体験を新たに語ることへの葛藤を再構成するところから始めよう。

1. 「親世代」の戦争の言説

1-1. 戦争の熱狂と戦争の「高貴さ」、「偉大さ」、「美しさ」

第一次世界大戦が勃発してから間もないうちに、知識人たちは数多くの講演をおこない、また、共同で声明を發表することによって各々の立場を表明した。とりわけドイツにおいてこの傾向は顕著であった。現実的にみるなら戦争とは、政治の延長にすぎない。国益のためにおこなわれるいわば外交手段である。もちろん、戦争のときに自らの発言が社会に影響をおよぼす立場にいる人間なら、このクラウゼヴィッツのテーゼが念頭にあってしかるべきであろう。しかし、1914 年の大戦が開始された直後、いったい誰がこのテーゼを念頭に各々の見解や立場を冷静にあらわすことができたのだろうか。第一次世界大戦に熱狂したのは政治家たちだけではなかった。シュテファン・ツヴァイクは、第一次世界大戦が勃発したときの社会の熱狂を回想し、ツヴァイク自身もその興奮の渦を前にして例外ではなかったことを次のように告白している。

真実を尊重するために、わたしは告白しなければならないが、この最初の群集の出発には、何か偉大なもの、魅惑的なもの、いやそれどころか誘惑的なものすら含まれおり、そこから逃れることは困難であった。わたしは、戦争にたいする憎悪や嫌悪の一切にもかかわらず、この最初の日々の記憶を自分の生涯において見失いたくないのである。平和のときにおいてこそもっと感じておかなければならないはずであったことを、何千何十万の人間がこれまでにないほど感じていた。つまり、みなが一ひつの全体であったことを。二百万人が暮らす都市、ほぼ五千万人が暮らす国は、この瞬間に自分たちが世界史を、決して二度とはめぐってこない瞬間を共に体験しているのだということ、各人が矮小な自我を燃えたぎっている群集のなかに投じ、あらゆる利己心から自己を浄化するよう呼びかけられているのだということを感じていた。³

後に反戦主義を唱えたツヴァイクさえも魅惑したこの世界大戦の勃発は、社会のなかで

³ Zweig, Stefan: *Die Welt von Gestern. Erinnerung eines Europäers*. Frankfurt am Main 1952, S. 207.

孤立していた個人をドイツという「ひとつの全体」へと結びつける契機として喜んで迎えられたのであった。この告白で吐露されている、開戦による国民的一体感の高揚がもたらす国民的統合の力、これこそがドイツ帝国に欠けていたものである。そうしたきわめて情緒的な共同体への願望は、広範な知識人をとらえていた。激烈な言葉で戦争を推しすすめたのは、詩人、文学者、哲学者、神学者、科学者など、本来なら芸術につかえるべき人間や学問につかえるべき人間であった。実際の戦争の原因や利害の対立をひとまず議論の対象とせず、熱狂的な雰囲気の中で、誰もが各々の視点で戦争から意義深いものを引きだそうとしたのであった。トーマス・マンの言葉を借りると、かれらはまさに「思想勤務に召集された」⁴のである。

それでは当時の知識人たちはどのような戦争のイメージをつくりだし、戦場に赴く兵士たちを鼓舞する社会の雰囲気を形成したのであろうか。さまざまな角度から発せられるかれらの言葉によって紡ぎだされる戦争のイメージは、捉え方こそ異なるが、かなりの類似性がみられる。ドイツの言論空間で多角的に論じられ形成されたイメージの集合が、前線兵士たちの「親世代」の知識人たちによってうみだされた第一次世界大戦の言説である。

1915 年、マックス・シェーラーは、これまで蓄えてきた形而上学を動員し、「戦争の守護神」なるものを賛美した。シェーラーによると戦争は、一切の個人主義を超えた生の普遍的原理にもとづく「国民の生命意思の誕生」である。⁵ 戦争を、国益をめぐる争いとしてみるのではなく、もっぱら精神的な闘争として解釈する思考はシェーラーに限ったことではない。エルンスト・トレルチは、1916 年、「1914 年の理念」⁶ という講演において、自身の好戦的な立場の正当化をこころみた。なるほど、トレルチは国際情勢で

⁴ Mann, Thomas: Betrachtungen eines Unpolitischen. In: *Thomas Mann Große kommentierte Frankfurter Ausgabe*. Bd. 13. 1. Hrsg. v. H. Detering, E. Heftrich, H. Kuryke, T. J. Reed, Th. Sprecher, H. R. Vaget u. R. Wimmer. Frankfurt am Main 2009, S. 11.

⁵ Vgl. Scheler, Max: Der Genius des Krieges und der Deutsche Krieg. In: *Max Scheler Gesammelte Werke*. Bd. 4. Hrsg. v. Manfred S. Frings. Bern/München/Franke 1982, S. 34.

⁶ 「1914 年の理念」の命名はヨハン・ブレンゲにはじまる。この理念が要請された全体の傾向としては、民主主義や人権という西欧諸国の宣伝にたいして戦うため、ある種の世界観のうえでのささえを必要としたところから生じている。命名者であるブレンゲ自身は、戦時経済のなかにフィヒテの理想が実現されていると賛美した。Vgl. Bleuel, Hans Peter: *Deutschlands Bekenner: Professoren zwischen Kaiserreich und Diktator*. Bern/München/Wien 1968, S. 77ff.

の西欧諸国による各国の分割と、それに参加しようとするドイツをおさえこもうとする帝国主義的政争が戦争を引き起こしたことを認識している。⁷ しかしながら、この実際的な問題の認識を超えて、「1914 年の理念」へと論点がうつされるや否や、ドイツ特有の形而上的戦争論が展開される。トレルチは、実際の政治の利害対立を超えたところでのみ「1914 年の理念」は把握できると主張する。その意味するところによると、第一次世界大戦の勃発は、唯物論と実利的思考によって窒息されつつあったドイツ精神、とりわけドイツ観念論の勝利を意味する。⁸ 「運命と感覚との神秘的な関連、感覚的・現世的な本来の力である超感覚的世界の光栄による、むきだしの死せる塊や力などの一切の克服」⁹ こそが「1914 年の理念」によって達せられるべき課題である。この偉大な大戦によって、ドイツ人はふたたび非物質的な価値である祖国や民族にみずからを捧げることが可能となる。トレルチは、フランス革命における自由の理念を狂信的なドグマとみなし、それにたいして、ドイツ的自由を集団への献身や規律であると説く。さらに、集団への献身こそドイツ的自由であり、その規律精神がドイツの軍国主義をささえているといつて憚らない。¹⁰ つまり、トレルチは、個人主義・自由主義を克服する「1914 年の理念」を「1789 年の理念」に鋭く対置させ、この理念のもとに生まれつつある共同体に形而上的・宗教的意味をあたえようとしたのである。

このようにシェーラーやトレルチは、西欧とドイツとを政治上の対立として捉えるだけでなく、その対立図式を自らの文化や精神の次元にまで深めることで、「1914 年の理念」に明確な形をあたえようとした。つまり、かれらは「1914 年の理念」に個人主義・自由主義を克服する原理を見いだそうとし、それによって脅かされつつあったドイツ的「文化」を救済することを意図したのである。この戦争の形而上的な傾向は、すでにドイツの大学教員の言論空間において支配的な位置を占めていたといえよう。1914 年 8 月 3 日、バイエルンの大学の学長と理事会は学生にたいして次のような演説をおこなった。

⁷ Vgl. Troeltsch, Ernst: Die Ideen von 1914. In: *Deutscher Geist und Westeuropa. Gesammelte kulturphilosophische Aufsätze und Reden*. Hrsg. v. Hans Baron. Aalen 1966, S. 31ff.

⁸ Vgl. ebd., S. 37ff.

⁹ Ebd., S. 38.

¹⁰ Vgl. S. 48ff.

学生諸君！ ミューズは沈黙した。われわれは戦争を強いられている。クルトゥーアを脅かす東方の野蛮人とドイツの価値間を妬む西方の敵が仕掛けた戦争だ。われわれはそれらを護り抜かねばならない。チュートンの熱情はふたたび炎と燃え、解放戦争への熱い思いは燃えさかる。聖戦ははじまったのだ。¹¹

さらに、1914 年 10 月、301 名が署名した「ドイツ帝国大学教師宣言」のなかで大学教員たちは次のように呼びかけている。

ヨーロッパ文化全体にとって、その幸福はドイツの「軍国主義」が戦いとる勝利にかかっている、というわれわれの信念は、規律であり、忠義であり、一致団結した自由なドイツ民族の祖国に殉ずる勇気である。¹²

これらの演説から次のレトリックが指摘できよう。それは、学生を戦場に送り出す大学教員たちが、「文化」と「軍国主義」とを調和させるレトリックを用いていることである。ここで、なぜ当時のドイツにおける知識人の思考では「文化」と「軍国主義」が容易に結びつきえたのだろうかという疑問が生じる。たしかに、これまで論じてきたシェーラーやトレルチは、「軍国主義」から離れなかったが、その野獣性あるいは残虐性を公に求めていたわけではなかった。かれらはむしろ「軍国主義」にかんする解釈熱なるものにながされていたといえよう。そこで持ちだされたのが西欧の「文明」に対立するドイツ的「文化」であり、それは軍国主義によって守られなければならないというものであった。穿ち過ぎともいえるこの言論状況において、「文化」と「軍国主義」の調和について考察した代表的論客を挙げるなら、矛盾をはらみながらも大戦期間中終始この問題にとり憑かれたように何度も論じたトーマス・マン以外に存在しないだろう。

フランスとドイツの知識人たちが「文明」対「文化」、理性対野蛮といった仰々しい概念で自らを正当化し、他方を非難するという言論戦のなかで、1914 年 8 月から 9 月にか

¹¹ モーリス・エクスタインズ『春の祭典——第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』（金利光訳、TBS ブリタニカ 1991 年）、136 頁。

¹² Bleuel, a.a.O., S. 76.

けてマンは「戦時の思想」と題されたエッセイを発表した。そこで論じられている「文化」とはどういう内実をもつのだろうか。このエッセイは、書き出しの一文から混乱する言論戦のなかで概念上の整理をしようという意図が伝わるが、マンが概念の性質を羅列するたびに輪をかけて概念自体がきわめてとらえどころのないものになっている。ともあれ、マンの思考に沿って、かれのいうドイツ的「文化」の内実をみてみよう。

まず、マンはジャーナリズムによって「文化」という意味が「文明」と同義語として誤ってつかわれていることを指摘し、両者は相対立する概念であると主張する。マンによると、「文明」は「理性、啓蒙、緩和、行儀の良さ、懐疑、解消——つまり精神である。」¹³ それにたいして、「文化」は「統一性、様式、形式、態度、趣味であり、ある種精神的な世界の組織化 *Organisation*」¹⁴ である。その性格は「冒険的で、奇抜で、野性的で、血生臭く、おそろしいもの」¹⁵ だという。こう特徴づけられた「文化」は、「神託、魔術、少年愛、アステカ神話の軍神ウィツィロポチトリ、人身御供、オルギアの礼拝形式、アウトダフエ、舞踏病、魔女裁判、毒殺の血、きわめて派手な恐怖」¹⁶ といった形で現れる。このように「文明」側の反感を煽るような論調で、「文化」の野蛮な側面を列挙したうえで、マンは「文化」のうちに含まれる芸術も非理性的であり、それどころか「デモニーシユなもの的高尚化」¹⁷ であると論じる。ここでマンの論点は、芸術と戦争との同一視へとうつされる。芸術家の技術と想像力によって作品が製作されるように、戦争も兵士の行動によってうみだされる。兵士たちは「自分自身にたいする仮借なき態度」¹⁸ で、規律ある軍隊全体へと「組織化」される。こうした態度は、素材と格闘し作品全体へと仕上げる芸術家の態度に他ならない。¹⁹ それゆえ、「すべては軍隊的であると同時に芸術家的である」²⁰ という命題がドイツ特殊のなかたちで成りたつとマンは

¹³ Mann, Thomas: Gedanken im Kriege, In: *Thomas Mann Essays II 1914-1916. Große kommentierte Frankfurter Ausgabe*. Bd. 15. 1. Hrsg. v. H. Detering, E. Heftrich, H. Kuryke, T. J. Reed, Th. Sprecher, H. R. Vaget u. R. Wimmer. Frankfurt am Main 2002, S. 27.

¹⁴ Ebd.

¹⁵ Ebd.

¹⁶ Ebd.

¹⁷ Ebd., S. 28.

¹⁸ Ebd., S. 30.

¹⁹ Vgl. ebd., S. 29.

²⁰ Ebd., S. 30.

いう。

もちろん、戦争と芸術との同一視は、マンに始まったことではなく、すでに未来派が唱えていたことである。²¹ 未来派のような芸術思潮に属する者であれば、この言葉は説得力をもって響いていたことだろう。しかし、ロマン・ロランを憤慨させたあきれるほど大胆なマンの論は、ドイツの社会に真剣に受けとめられたと思われるだろうか。奇妙なことに、1914 年の大戦に参加した 1890 年代生まれの青年たちには、マンが論じたような戦争と芸術との結びつきがまぎれもない真実として受けとられていたのである。

「親世代」の言葉に勇気づけられ戦場に赴いたハイデルベルグ大学哲学科学学生ルドルフ・フィッシャーは、1914 年 11 月 18 日に家族に宛てた手紙のなかで次のように述べている。

ぼくは再びこころの落ち着きを取り戻しております。両親や兄弟のため、愛する祖国のため、ぼくにとってこれまで最も価値あるものであったすべてのため、協力し戦ってもよいことを誇りに思っております。詩、芸術、哲学、文化のために、戦っているのです。戦いは悲しい *traurig* ものですが、偉大な *groß* ものでもあります。崇高な厳粛さ *ein erhabener Ernst* がこの戦場での生活全体に行きわたっております。²²

²¹ ただし、マンと未来派における戦争と芸術との同一視にかんしては位相が異なる。未来派は、速度・機械・ダイナミズムを賛美し、その究極の表現を戦争にみている。未来派にとって戦争とは、近代技術がもたらした破壊的側面を新しい芸術へと近づけるものである。それにたいしてマンは、作品製作の伝統的観点から、忍耐をもって作品全体へと仕上げ「組織化」する過程を軍事的組織化と同一視している。キャロライン・ディズダル／アンジェロ・ボッツォーラ『未来派』（松田嘉子訳、PARCO 出版 1992 年）、7～20 頁を参照。

²² *Kriegsbriefe gefallener Studenten*. Hrsg. v. Philipp Witkop. München 1928, S. 19. この前線兵士の手紙は、二万通以上の書簡から編者によって選びぬかれたもので、大増補版が 1928 年に刊行され、1933 年版はナチ党の権力掌握後に刊行されている。1928 年版の編者の序文はまだ抑えられた調子で語られていたが、1933 年版の序文には次のような激烈な言葉が並びたてられている。「ドイツ！祖国！これらの言葉、これらの価値が、これ以上に熱烈に崇高に宗教的崇重さをもって体験されたことはいまだかつてない。[……]ドイツ精神のあらゆる深さ、ドイツ魂のあらゆる高貴さが、戦争と死と祖国との地平線のまえて、これらの若い勇士たちのなかに姿となり言葉となった。」*Kriegsbriefe gefallener Studenten*, Hrsg. v. Philipp Witkop. München 1933, S. 5f. ナチ党の権力掌握後のドイツにふさわしいものにするべくこのような美しい言葉が編者によって並びたてられているが、前線兵士たちが死を前にして書き綴った言葉だけは、後に論じるように検討するに値する歴史的証言だといえ

この手紙を読むと、前線兵士がいかにアンビヴァレントな感情でもって戦争に対峙していたかわかるだろう。戦争を「悲しいもの」ではあるが「偉大なもの」としても享受するとき、かれらは絶望と美を同時に味わっている。それもそのはずである。「親世代」の言説における中心的トポスの一つである戦争の「偉大さ」が、前線兵士の率直な心情の吐露に他ならない「悲しい」という感情に入り交じって現れているのだから。開戦直後に戦場に足をふみいれた青年にとって戦争というものは、「偉大なもの」であらねばならず、その「崇高な厳粛さ」が軍の生活全体を覆っているように思われた。前線兵士の口から発せられた、芸術や文化のための戦争、これこそが大戦勃発時に「親世代」の知識人たちがうみだした「高貴な」戦争の言説を特徴づけるものである。「親世代」の言説は、未曾有の世界大戦に直面した青年たちが、各々の体験を言語化するのに支配的な影響をあたえていたといえる。

1-2. 語られていた体験——前線兵士の手紙にみる「親世代」の言説にたいする懷疑

このように第一次世界大戦勃発時に諸個人を統一するため、何にも増して要請されたのは、「親世代」の言説の説得力、そして論争によって触発される政治的想像力だといえる。それでは、「親世代」の戦争の言説は、四年にも及ぶ第一次世界大戦のなかで持続して一定の効果を前線兵士に及ぼし続けることができたのであろうか。前線兵士たちの語りの変化を論じるにあたって、まず「親世代」の代表的知識人であるトーマス・マンが前線兵士の手紙に語らせる箇所を検討してみよう。

第一次世界大戦勃発から三年、1917年8月、トーマス・マンは『非政治的人間の考察』の「人間性について」という章の執筆にあたっていた。そのなかでマンは、平時には学生であり詩人でもあった若い予備役中尉がマン宛てに寄こした手紙をとりあげ、最も印象深い兵士の体験を次のように読みあげている。

「この完全に無力な状態にいて、昼夜にわたり来る日も来る日もたいい雨のとき

よう。

に集中砲火をあびながら、攻撃を防ぐものもない塹壕に身をひそめ、身の毛もよだつ荒廃のなかで防御地帯の轟音にさらされていると、人間は簡単に愉快的気持ちになります。[……]この死を通りぬけた歩みは、わたしにとって計り知れないほどの至福な苦悶であり、解放でもあったのです。[……]奇妙なことには、こうして測りしれないほどの辛苦の無理な要求をされているにもかかわらず、笑いだしたくなりません。あらゆる心配ごとやいかなる責任からもそれほどまでに解放されており、それほどまで完全に神の手のなかにいるのです。」²³ [強調はマン本人]

こう読みあげた後でマンは、手紙で語られる宗教的な自由と晴れやかさにアクセントをおいて論を展開する。²⁴ マンがこの手紙で評価するところは、たとえ戦時中の生活状態で人間が肉体的・精神的に野蛮な状態に陥ったとしても、極限状況における前線兵士のたましいの「高貴さ」が保たれていることであり、それは「人間的なものの高揚」²⁵のあらわれに他ならないということである。そして、前線兵士にとって戦友と過ごした塹壕生活は、「この上なく緊張した、度を超えた、きわめて心を揺れうごかす人間形成的でぜいたくな生活であったし、ぜいたくな感情、けだかい戦友愛、心からの敬虔さ、そしてそのほか人間形成につながると心得ていること」[強調はマン本人]にも満ち足りていたはずである。²⁶ この手紙を送った前線兵士の態度こそ模範的なドイツ的兵士の姿であるとマンは捉えている。数多くの前線兵士の手紙からこの手紙だけを取りあげ、自身の解釈の助けとなるようなアクセントの置き方をすれば、理想とする兵士像も浮かび上がるだろう。しかし、前線兵士たちが家族のもとに送った多くの手紙とマンによって意図的に取り上げられた手紙とを比較してみれば、前線兵士たちが戦場の悲惨な体験を、「死そのものの超克」²⁷と解釈し自らの言葉でもって語りえたかどうかは、甚だ疑問となる。

前線兵士の手紙のなかで、死を確信したときに家族に向けて発せられる言葉は、まぎれもなくかれら自身の声に違いない。しかしながらドイツの前線兵士の手紙を時系列的

²³ Mann, *Betrachtungen eines Unpolitischen*, Bd. 13. 1, S. 499f.

²⁴ Vgl. ebd., S. 500ff.

²⁵ Ebd., S. 502.

²⁶ Ebd., S. 501f.

²⁷ Ebd., S. 499.

に整理すると次のような語り方の違いがみられる。開戦当初、前線兵士たちが戦争体験を意味づけるため頻繁に使用した語は、銃後の人々、とりわけこれまでみてきた知識人たちが前線兵士を鼓舞するために用いたものとはほぼ変わることはない。ドイツのためになされる戦争は「高貴」で、「偉大」で「美しく」、戦闘行為そのものは「英雄的」である、と。もちろんこれらは、1914 年以前に政治的世界像を刻印された知識人たちがかたちづくった第一次世界大戦の言説から発せられた言葉に他ならない。だが、大戦中の陰惨な条件のもとで青年から大人へ成長せざるを得なかった前線兵士たちが塹壕戦を長期間耐えたときに語る言葉は、極めて異質なものと変化しているのがわかる。とりわけ第一次マルヌ開戦後、1915 年から終戦までつづいた泥沼の消耗戦に突入した塹壕戦に耐えるなかで、前線兵士たちの語りは——もちろん個人差はあるが——極めてくぎこちないものへと変化していることがわかる。1915 年 10 月、ライプツィヒ大学法学部生だったフーゴ・ミュラーは次のように述べている。

今日も人間の身体の断片が鉄条網にぶらさがっています。つい最近までわれわれの塹壕のまえに指輪をはめた手が一本横たわっていました。そこから数メートル離れたところでは二の腕が一本横たわっていました。しまいにはそれは骨だけになりました。ネズミは人間の肉がとてもお好みなのです。ぞっとするのです *Scheußlich*——こうした感覚を知らない者はここに来れば味わえます。ぼくは忘れてしまったのです。[……]ぼくも時間がたつにつれて慣れてしまい、戦友たちと同じく冷淡になってしまいました。戦争は心と気持ちをすさまじく、普段なら人間を感動させるような一切のことにたいして人間を冷淡 *kalt* にするのです。²⁸

あるいは、1918 年 2 月、パウル・ベーリケは自身が置かれた状況について整理がつかないまま次のように書きなぐった。

ヴェルダン、ぞっとする言葉だ！ 若く希望に満ちあふれていた無数の人間がここ

²⁸ *Kriegsbriefe gefallener Studenten*, S. 244.

で命を落とさなければならなかった——かれらの亡骸はどこで腐っているのか、陣地の間で、共同の墓穴で、墓地で。[……]戦線が揺れうごいている。今日は敵が高地を占領し、明日はわれわれが占領する。ここではいつでもどこかで絶望的な戦闘が行われている。[……]平和や故郷の夢のすべてが消え失せ、人間は虫けらになり、一番深い穴を探す。連続放射。息もできないほどの煙——ガス——土の塊——空で激しく錯乱し渦巻く破片の他には何もみえない戦場。これがヴェルダンだ！²⁹

こうした発言から、戦争からは「高貴さ」が奪われ、もはや戦争は芸術にたとえられるような創造的なものでもなんでもないことが露呈されている。前線兵士たちは、死が日常化したなかをただ生きなければならない。戦争勃発時の熱狂は消え失せ、ある者は自らを「虫けら」のように感じ始め、恒常的な恐怖によって一切にたいして「無関心」になってしまった。これが塹壕戦を体験した前線兵士が言葉足らずながらも伝えようとした光景である。かれらは、凄惨な光景を前にしても「ぞっとする」ばかりで、自らの感情を従来のカテゴリーで表現できなくなっている。文法的に不完全な文章や単語のみを發した文章が頻繁にあらわれ、このことが現実描写の困難さを何よりも物語っている。描写の困難さに加えていうと、かれらにとって、歴史上初めての物量戦にたいして意味付けをおこなう「解釈」などもつての他である。以上のことから、前線兵士たちは、これまで「親世代」が發してきた戦争の概念と感情がいかに現状にそぐわないものになってしまったかを感じ取っていたといえる。このように「親世代」の戦争の言説と前線兵士の現実の語りを比較すると、次のことが浮き彫りとなる。第一次世界大戦勃発当初、前線兵士たちは、自らの体験を語っていたのではない。かれらは銃後にいる「親世代」の言葉で語られていたのである。

1-3. 既存の言語体系にたいする幻滅——体験の語りにみる<雄弁さ>の喪失と<ぎこちなさ>の芽生え

こうした前線兵士の使う言葉の<ぎこちなさ>は、ほぼ同時期に、銃後の知識人が發

²⁹ Ebd., S. 351f.

する言葉の〈雄弁さ〉と対置したとき明確になる。すでに塹壕戦が泥沼化していた 1917 年、トーマス・マンは次のように豪語する。

かりにわたしが前線に出征したとしても、かりにわたしが破壊の惨状を目の当たりにしたとしても、[……]わたしは冷酷であることをやめず、「愛国的」であることをやめず、「ご機嫌」であることをやめず、「わたしの寄稿誌」にジャーナリスティックで使いものになる報告を書き送るほど粗野なことまでやってのけるであろう。³⁰

たとえこの発言が文明の側の人間にたいして向けられたあてつけであったとしても、少なくともマンは、塹壕戦の体験を、市民社会で使われていた言語体系で語りうるものとして理解していたことがわかる。つまり、銃後と前線の意味疎通はなんの障壁もなくおこなわれるであろう、と。こうした銃後の知識人の無理解にたいしては、すでに前線兵士から疑惑の目がむけられている。

個々人を苛むちょっとしたことを語ることなど到底できやしないし、何がここでわれわれを形づくっているのか、何が深い印象を性格のなかに刻みつけているのかを語ることなどできやしない。戦争の現場から家へ大げさな報告を送ることができる者は——戦場で何も体験しなかった人間だ。事実を描くというのか！ だけど、あるがままに描くことなど到底できやしない。³¹

ここで赤裸々に綴られていることは、自らの体験を他者に伝えることがいかに困難であるかという問題である。「親世代」の価値観を信じこんでいた前線兵士たちは、この問題に思いがけないかたちで直面せざるをえなかった。第一次世界大戦の総力戦によって前線と銃後との軍事的・地理的距離が生じたのであるが、それだけにとどまらず、ここに世代間の断絶を捉えたのはベンヤミンである。

³⁰ Mann, a.a.O., S. 498.

³¹ *Kriegsbriefe gefallener Studenten*, S. 89.

経験の相場はすっかり下落してしまった。このことは、1914 年から 18 年にかけて、世界史のなかで最も恐ろしい出来事のひとつを経験した世代において起こっている。もしかすると、これは思われているほど不思議なことではないのかもしれない。当時われわれは戦場から兵士たちが沈黙したまま帰ってくるのをはつきりと確認することができたのではなかったのだろうか？ 伝達できる経験がより豊かになったのではなく、いっそう乏しくなって、かれらは帰ってきたのであった。³²

それもそのはずで、前線世代の兵士は主に 1880 年から 1900 年までの生まれで、幼年期から青年期を市民社会で暮らしていた。³³ かれらはその頃——市民社会から離れて多少の冒険的憧れをもって「反抗」した若き教養市民層の個人的・逃避的運動はすでに存在していたが³⁴——市民的価値観にささえられた言葉を話し生活するのにこれほどにまで違和感をおぼえることはなかったはずである。熱狂的な雰囲気の中拍手喝采で「親世代」に見送られたとき、旧来の言語体系が戦場の描写にとってもはや機能しないことを誰が予想できたというのであろうか。ベンヤミンが正しく認識したように、近代技術の途方もない発展が「経験」の崩壊をもたらすことを、誰が認識していたのだろうか。言葉を絶する物量戦・塹壕戦を目の当たりにしたとき、前線兵士たちは「経験というものの虚偽が徹底的に暴かれた」³⁵ ことに気づいたのである。「親世代」から受け継ぐはずの言語体系を中心とした文化的遺産から前線兵士は切り離された。それゆえ、かれらの語

³² Benjamin, Walter: Erfahrung und Armut. In: *Illuminationen*. Ausgewählte Schriften 1. Ausgewählt. v. Siegfried Unseld. Frankfurt am Main 1977, S. 291.

³³ ボイカートは、戦争を経験した者を四つの世代にわけている。「ヴィルヘルム二世と同年輩のヴィルヘルム世代」、「帝国が創立された 70 年代に生まれた創立期世代」、「19 世紀の 80 年世代、90 年に生まれた前線世代」、「そして 1900 年以降に生まれた、いくつかの意味で余計者世代」[強調はボイカート本人]。とりわけ本稿では、「前線世代」について考察するため、ここに属する人物をあげると、アドルフ・ヒトラー、エルンスト・テールマン、ヴァルター・グロビウス、ゲオルゲ・グロス、エーリッヒ・マリア・レマルクそしてエルンスト・ユンガーなどがいる。とりわけ目につくのは、この世代が 1920 年代のアヴァンギャルド文化を代表する名前が多いこと、そしてヴァイマル末期に左派・右派の政治的急進主義として指導的な役割を担う人物が多くいることである。テートレフ・ボイカート『ワイマル共和国——古典的近代の危機』（小野清美／田村栄子／原田一美訳、名古屋大学出版会 1993 年）、18~22 頁を参照。

³⁴ 田村栄子『若き教養市民層とナチズム』（名古屋大学出版会 1996 年）、53 頁以下を参照。

³⁵ Benjamin, a.a.O., S. 291.

りから<雄弁さ>が消え失せたのである。しかしながら、その代わりに前線兵士の言語に特有の<ぎこちなさ>が目立ってくるのは、もちろんベンヤミンのいうように「経験の貧困」の結果でもあるが、それは同時に近代戦をいかにイメージし社会に伝達することができるのかという問題をかれらが真摯に受けとめていたあらわれともいえよう。³⁶

2. ヴァイマル末期における戦争文学の状況

2-1. 戦争体験の「真実」の不可能性

前線兵士たちは第一次世界大戦の戦場を体験したまさに証言者であった。かれらは大戦の意味を理解するとき、文明の進歩や国益のためという大義名分がまったく無効になってしまったという感覚に貫かれていた。だが、かれらが塹壕戦を体験したとはいえ、証言者の語りとはたして「真実」であるといえるのだろうか。言い換えれば、いかにしてその真偽を判断するための現実性や妥当性を根拠づけることができるのだろうか。

この根拠づけは、困難な問題を含んでいる。なぜなら、まず、戦争体験を文字化するとき、それは著者の個人的な体験であるため、かれらの解釈が意識的・無意識的に混在することになる。とくに戦争文学として語るなら、プロットに従うよう物語構成する必要があり、それにそぐわないイメージは構成上排除されがちである。こうして、作者によって体験が文字化されると、いかに現実を描いていると作者が主張したところで、客観的な公式資料や記録との一致を完全につきつめることが不可能となる。したがって、語られた体験の「真実」は実証することができない。³⁷

次に、前線兵士たちが戦争体験を「真実」として語るとき、戦争体験のなかに真の国民的共同体を求める神話的な意味づけがともなう。これまでの第一次世界大戦の戦争体験についての研究がしめしてきたように、前線兵士たちの戦争体験が世界観にまで高められた結果、その体験の精神性を政治の原動力にした新しいナショナリズムがうみださ

³⁶ 近代戦はイメージ可能であるかという問いは、とりわけ前衛芸術に色濃くあらわれている。ただし、河本真里によれば、この問題意識は前衛芸術のように「断片化」するだけでなく、その喪失を埋め合わせるかたちで統後でも「総合」という、相反する傾向が同時に起こした。河本真里『葛藤する形態——第一次世界大戦と美術』（人文書院 2011 年）、149 頁以下を参照。

³⁷ Vgl. Müller, Hans-Harald: *Der Krieg und die Schriftsteller. Der Kriegeroman der Weimarer Republik*. Stuttgart 1986, S. 20ff.

れた。³⁸ 新しいナショナリズムはヴァイマル共和国の反民主主義思想において中心的位置をしめる。偉大な戦争を契機とし、国民の進むべき道をしめすイデオロギーが形成されたのである。³⁹ こうして戦争体験は戦争体験の神話へと変貌する。たしかに他国でもこの種の神話化はありえたが、敗戦国であり政治的安定性に欠けていたドイツではとりわけ右派の政治的影響力が強かったといえよう。⁴⁰

こうしたヴァイマル末期の政治的動向を踏まえたうえで、戦争文学の解釈が当時の精神状況にいかなる影響を及ぼしたのかを検討してみよう。まず、ヴァイマル末期の戦争の評価を概観すると、1929 年以降の戦争文学の捉え方は根本的に異なる二つの解釈がおこなわれていたことがわかる。一方は人間を苦しめる無意味なものとしての否定的な戦争観で、もう一方は毅然たる態度で受けとめなければならない人間の運命としての肯定的な戦争観である。⁴¹ 前者はレマルクの『西部戦線異状なし』を代表とし、後者はユンガーの『鋼鉄の嵐のなかで』を代表として捉えていた。⁴² 次に、戦争文学が大量に出版され政治的権力をめぐる言論空間が形成される時期をみると、興味深いことにその時期は第一次世界大戦終結直後ではなく、1929 年以降、レマルクの『西部戦線異状なし』(1929)が出版されてからであることがわかる。⁴³ つまり、第一次世界大戦終戦から

³⁸ Vgl. Sontheimer, Kurt: *Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik. Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen 1918 und 1933*. München 1964, S. 115ff.

³⁹ Mosse, op. cit., pp. 53f.

⁴⁰ ヴォールは両大戦間の世代問題をあつかった先駆的研究で、「青年イデオロギー」とよばれるものは第一次世界大戦前にすでに形成されていたことをしめしている。さらに、このイデオロギーは前線兵士の体験を通して強化されたという。Wohl, Robert: *The Generation of 1914*. Cambridge 1979. モムゼンは、ヴォールの論がブルジョワ知識人の特定の階層に限定された反抗とみなしていることを批判して次のように論じた。モムゼンによると、世代間問題についての当時の公的な論議や、右派の抗議運動による世代間問題の利用は、ヴァイマル共和国の社会意識の変化に根本的な役割を担っていた。これがヴァイマル共和国の政治体制に揺さぶりをかけ危機的状況をもたらしたのである。ハンス・モムゼン「ワイマール共和国における世代間抗争と青年の反抗」(住沢とし子訳):『思想』第 711 号(1983 年)、97~112 頁を参照。

⁴¹ 第一次世界大戦の大量死や破壊といった衝撃が前線世代にもたらした自己意識を内在的に描きだし、前線世代のナショナリストであるユンガー、ツェーラー、ユングらが戦争体験から導きだそうとした文化革新の願望を論じたものとして、以下を参照。川合全弘「戦争体験、世代意識、文化革新——ドイツ前線世代についての一考察——」:『産大法学』第 33 巻 3・4 号(2002 年)、56~83 頁を参照。

⁴² Vgl. Sontheimer, a.a.O., S. 116-128.

⁴³ 第一次世界大戦後十年経てようやく戦争文学の言論空間が形成されたのはドイツのみで、アメリカ、英国、フランスでも大戦直後に膨大な戦争文学が出版され言論空間は形成されていた。Prümm

約十年を隔ててはじめて戦争体験の描写と解釈がさかんに問い直されたのである。こうして 1929 年以降、ナショナリズムの視点にたつ戦争文学が大量に出版された。この種の戦争文学は、『西部戦線異状なし』にたいする抗議、つまり戦争の「真実」が書かれていないという意味での抗議として登場した。⁴⁴ 戦争体験をめぐる解釈がさかんに論じられるなかで、無意味な戦争にたいする反戦主義をテーマであると思われていた『西部戦線異状なし』にたいして、批判者の誰もが戦争体験の本質について客観的に論じているかのように振る舞っていた。しかし、エクスタインズが論じたように、『西部戦線異状なし』に塹壕戦の「真実」なるものを読み込もうとするほうが間違いである。⁴⁵ なぜなら、レマルクの作品には多くの研究者が指摘するように事実そのものに歪曲がある。エクスタインズによると、第一次世界大戦終結後およそ十年という年月を隔てて出版されたこの作品は、戦争の実態や塹壕生活の真実を描きだしたものではなく、「戦争を生き、戦争に打ちのめされた若い世代の怒りを叩きつけた小説」⁴⁶ である。実のところこの作品は、「戦後という時点から振り返った戦争、すなわち戦後精神を描いたものである」。⁴⁷

そして、この作品自体が戦後精神を反映したものであったように、それにたいする批判もまた批判者自身の戦後の政治的立場を反映していたにすぎない。かれらの意図とは異なり、この種の批判は戦争体験の「真実」をめぐる反論ではなかったのである。それと同様にレマルクの戦争文学は、作者の生々しい体験の「真実」を語っていたわけでは決してなかったのである。

2-2. ヴァイマル末期における歴史家の沈黙と虚構の要請

このようにヴァイマル共和国における戦争体験の「真実」をめぐる権力闘争について

Karl: Tendenzen des deutschen Kriegsromans. In: *Kriegserlebnis. Der Erste Weltkrieg in der literarischen Gestaltung und symbolischen Deutung der Nation*. Hrsg. v. Klaus Vondung. Göttingen 1980, S. 215ff.

⁴⁴ この時期に出版された戦争文学を列举すればきりがなが、戦争を美化し肯定的に描いた代表的な作品には次のものが挙げられる。ヴェルナー・ボイメンブルク『ボーゼミュラー部隊』(1930)やハンス・ツェーバーライン『ドイツへの信仰』(1931)などがあり、とくに後者は 75 万部も売れ、ナチズムの戦争解釈に多大な影響をあたえた。

⁴⁵ エクスタインズ、前掲書、377 頁以下を参照。

⁴⁶ 同書、382 頁。

⁴⁷ 同書、382 頁。

検討してきたが、見落としてならないのは次のことである。それは、ヴァイマル共和国の社会あるいは読者が、歴史よりも文学に依拠するかたちで第一次世界大戦の意味を問い直そうとする傾向にあったことである。実際に当時の歴史家たちは戦争体験を語ることができなかった。1935 年、H・A・L・フィッシャーはそのことを振りかえって次のように告白している。

わたしより賢く教養ある者は歴史のなかにプロットとリズムとあらかじめ規定されたパターンをはっきりと識別していた。しかしながら、わたしはそうした調和を認識することなく、打ちよせる波のように次々と起る緊急事態をみていただけであった。⁴⁸

たしかに公式の戦争史やその一部として連隊史などは 1920 年代に数多く出版されていた。しかしながら、それらの公式の資料はそれ以降あまり読まれることはなく、これに関する議論が活発にされたというわけでもなかった。⁴⁹ ヴァイマル末期の社会で、第一次世界大戦についての歴史的文献と戦争文学とが対照的に受容されていたという事実は、次のことを教えている。戦争の意味を問い直すとき、当時の社会が想像力に訴える虚構の文学を必要としていたということである。虚構の文学のほうが歴史よりも戦争の「真実らしさ」に近いとヴァイマル共和国の読者層は理解していたのである。⁵⁰ したがって、ヴァイマル共和国の社会は、歴史的・社会的記憶としての戦争とはく別の体験としての戦争を文学に求めていたのである。

3. 『鋼鉄の嵐のなかで』の語りと表象

3-1. 「われわれ」の姿を認めさせること——歴史的・社会的戦争の記憶にたいする別の体験としての戦争

⁴⁸ Fisher, H. A. L.: *A History of Europe*. vol. I, London 1935, p. vii.

⁴⁹ エクスタインズ、前掲書、346~347 頁を参照。

⁵⁰ ミュラーは戦争文学の「真実」とは、作者の語っていることではなく、読者層がそれを「真実らしさ」に近いものとして受けとめている点にあるという。なぜなら、体験の客観的現実性を裏づけることは不可能であるからである。Vgl. Müller, a.a.O., S. 28ff.

1929 年以降に頻繁に議論された戦争体験の社会的要請は、1920 年初頭のヴァイマル共和国においてはまだ表面化していなかった。第一次世界戦後まもなくして戦没記念碑が建てられ、無名兵士が埋葬され、定期的に追悼行事がおこなわれた。⁵¹ しかしながら、死者九百万人、負傷者二千万万人の犠牲の意味については誰も語ろうとしなかったという。生還した前線兵士たちも依然として沈黙したままであり自らの体験を公に語ろうとはしなかった。追悼式では「忘れてはならない」という言葉が述べられたが、「だれもが望んでいたのはまさに「忘れる」ということ」⁵² であった。したがって、第一次世界大戦の戦争体験とは個人だけでなく社会のレベルでも思いだされることを恐れられていた記憶に他ならない。

このように誰もが大战の記憶を抑圧していた社会状況で、エルンスト・ユンガーの『鋼鉄の嵐のなかで』(1920)⁵³ は刊行された。戦争体験と戦争にたいする戦後社会の反

⁵¹ 松本彰『記念碑に刻まれたドイツ——戦争・革命・統一』（東京大学出版会 2012 年）、98 頁以下を参照。

⁵² エクスタインズ、前掲書、344 頁。

⁵³ 『鋼鉄の嵐のなかで』はユンガーが戦場で書きためた十四冊のノートをもとに、四年間にわたる従軍体験を一人称の語りで描いた戦争文学である。戦場でのノートをもとに『鋼鉄の嵐のなかで』を描いたとはいえ、編者のキーゼルによると、そこには省略されたことや新たに付け加えられた出来事も数多く存在するという。さらに俗語調の文体などは修正されている。Vgl. Jünger Ernst: *In Stahlgewittern. Historisch-kritische Ausgabe*. Bd. 2. Hrsg.v. Helmut Kiesel. Stuttgart 2013, S. 57ff. 『鋼鉄の嵐のなかで』の初版は 1920 年に出版され、その後、第二版（1922 年）、第三版（1924 年）、第四版（1934 年）、第五版（1935 年）、第六版（1961 年）、第七版（1978 年）とそれぞれ大幅な加筆修正がされている。それぞれの版を加筆修正した背景にはユンガー自身の政治的背景および審美的背景がある。以下にそれぞれの特徴を簡単に述べる。初版は自費出版で 2000 部しか発行されていない。第二版はドイツの伝統的軍事出版社 Mittler-Verlag から出版されている。第一版から第二版にかけて文体の修正はしたものの加筆修正箇所は比較的少ない。両版とも政治色がまったくなく、愛国主義、祖国愛、国民といった戦争体験の意味づけは一切されていないことは、研究者間でも異論がない。第三版（1924）から政治的意味づけ、それも急進右派の戦争解釈が色濃くうつしだされる（ユンガーがナショナリズム論を発表し始めるのは三版の翌年、1925 年からである）。審美的な描写とイデオロギー的戦争体験解釈の拮抗がこの版で強くあらわれる。第 4 版（1934）では、ナショナリズムを主張していた文のすべてが削除される。このことは、加筆修正の作業をおこなっていた 1932 年から 1933 年のユンガーの政治的態度、権力掌握したナチ党からの政治的距離を反映しているといえよう。そのため本文には大幅に加筆修正が加えられると同様に、文体の審美性が強化される。このように『鋼鉄の嵐のなかで』は、各版によって大幅に描写と解釈が異なる。Vgl. Hanulak, Robert: *Ernst Jünger und sein Kriegstagebuch "In Stahlgewittern" – eine Untersuchung der verschiedenen Fassung vor dem Hintergrund der Jahre 1919-1934*. Norderstedt 2003. 本稿では、1920 年初頭のヴァイマル共和国の戦争文学の言論状況と読者層を背景に戦争体験を論じるため、ユンガーが実質的な執筆にあたった当時の歴史的背景を念頭に考察する立場から、初版および第二

応の落差を受けて、ユンガーは苛立ちをこめながら序文のなかで次のように述べた。

これが戦争のドイツの歩兵である。かれが何のために戦ったかということはどうでもよい。かれの戦闘は超人的であった。戦争を体験した息子たちは民族を超えて成長した。かれらは、英雄だとか英雄的な死だとかいう使い古された言葉、他愛もない新聞のおしゃべりを辛辣な笑みをうかべながら読んでいた。かれらはこのような感謝を求めているのではない。かれらは理解してほしかったのだ。⁵⁴

この箇所を読んだときおそらくヴィルヘルム時代に憧憬を抱く「親世代」の保守主義者たちは驚愕したに違いない。というのも、「親世代」にとっては「何のために戦ったか」という問いにたいしては、自明のものとして「祖国」や「ドイツ民族」のためにという答えが用意されていたのだから。ユンガーは、「1914 年の理念」のなかで中心的役割を担ったトポスには、もはや戦争の体験を意味づける力など残っていないと宣告しているのも同然である。もちろん「1914 年の理念」の無効化は、ヴァイマル共和国内での形式的な追悼行事で語られた、尊厳や名誉といった古い世界のスローガンで彩られた犠牲の意味にたいしても向けられている。この引用箇所において、ユンガーが戦争体験を物語ることを通じて社会にもとめているのは、愛国主義的色彩を加えて発せられていた銃後の側からの戦争体験の解釈を捨て去り、前線兵士の側から一方的に語られる体験に耳を傾けることである。前線兵士たちが手紙のなかで感づいていた、「親世代」によって語られていた戦争のイメージを一掃し、前線兵士の一人としての戦争の語りとイメージを新たに創出することへの挑戦といえる。

このように「親世代」の戦争体験の偽装を批判したうえで、ユンガーは初版の序文で戦争体験の描写の方法を次のように述べる。

この書の目標は、大戦中に武勲をたてた連隊のなかで、ひとりの歩兵が二等兵とし

版のテキストを扱うこととし、底本は以下のものを使用する。Jünger Ernst: *In Stahlgewittern. Historisch-kritische Ausgabe*. Bd. 1. Hrsg.v. Helmut Kiesel. Stuttgart 2013.

⁵⁴ Ebd., S. 19.

て隊長として体験したことや思い浮かべたことを読者にたいして事実に即して *sachlich* 描くことである。[……]わたしはわたしの印象を可能なかぎりそのままのかたちで紙に書きとめようとつとめた。なぜなら、いかに早く印象が消え失せ、いかにそれが数日後すでに別の色彩をおびてしまうかに気づいていたからである。[……]わたしは体験の新鮮さを保った。人は達成したことを理想化したり、不快なこと、取るに足らないこと、日常的なことをもみ消したりしがちである。気づかないうちに自分を「英雄」にしてしまうのだ。わたしは従軍記者ではないし、英雄コレクションを呈示するのでもない。どうありえたのかではなく、どうあったかということを描写しようと思う。⁵⁵

ここではっきりと著者自身の意図が書かれている。それは、従軍期間中に書きためたノートをもとに、無意識的におこなわれがちである理想化をおさえ、「事実に即して」語ることである。しかしながら、この発言には、戦争体験の記述と解釈をめぐる著者のアンビヴァレントな態度がすでにあらわれていることも指摘できよう。戦争の記述は「事実に即して」におこなわれるべきで、倫理的な価値はできるかぎり排除するべきであるとユンガーは主張するが、それにもかかわらず自身の文学作品を従軍記者の報告と区別するために、個人的な観点から考察をくわえざるをえない。ユンガーのいう客観的な記述という側面からみると、著者は英雄として登場させられるのではなく、前線を目指したひとりの証言者として位置づけられていることがわかる。初版の副題には「ある突撃隊長の日記から」⁵⁶と書かれており、著者の脱英雄化という意図を裏づけると同時に、この副題は、銃後にいる人間が解釈しようとした前線兵士の英雄的行動の記録でもなく、公式の第一次世界大戦史とも一線を画する戦争の記録であることを強調していると理解できよう。しかし、全体をとおして著者の主観的な解釈が本文中に鳴り響いているのもたしかである。

それは、一人称単数で語られるはずの日記であるにもかかわらず、一人称複数の「われわれ」の語りをとおして出来事の意味づけをおこなう箇所にも色濃くあらわれる。こ

⁵⁵ Ebd., S. 20.

⁵⁶ Ebd., S. 12.

で「われわれ」によって代表されているのは、前線世代の語りである。「われわれ」は、銃後の社会が発信していたような神話化された戦争解釈が虚偽であることを認識する「幻滅の過程」を次のように述べる。

物質主義的な時代精神のなかで育ったため、われわれのなかには異常なものや偉大な体験への憧れが織り込まれていた。そんなとき戦争が陶酔のごとくわれわれを襲った。花々に見送られ、死に赴く者たちの酔い痴れた気分で戦場にむかった。戦争は偉大なもの、力強いもの、祝祭的なものをもたらすにちがいがなかった。われわれには戦争は男らしい行為、花が咲きほこり血に彩られた草原での愉快的射撃戦のように思われた。⁵⁷

1914年に勃発した戦争は、ヴィルヘルム時代の退屈な日常生活から開放してくれるように思われた。そう、この世代にとって戦争は、「偉大」で「祝祭的」で男らしいものに「ちがいがなかった」のである。もちろんこの箇所での語りは、世界大戦勃発時における「親世代」の言説に染まっていた青年兵士の意識をうつしだしているといえる。しかし、こうした英雄精神は、短期間のうちに物量戦・塹壕戦といった近代戦の現実によってあっけなく打ち砕かれる。塹壕戦の単調な労働を「事実在即して」描いた後で、「われわれ」は次のように語る。

連隊に短期間従軍した後、われわれは戦場に持参した幻想のほとんどすべてを失った。望んでいた危険のかわりに目のまえに見いだしたのは、汚れ、労働、そしていくつもの眠れぬ夜であった。それらを克服するためにはわれわれにほとんど持ち合せていない英雄精神なるものが必要だった。⁵⁸

本文中には連隊の兵士たちが地味な労働をおくる日々や塹壕のなかでモグラのように暮

⁵⁷ Ebd., S. 26.

⁵⁸ Ebd., S. 46.

らすさなど、期待していた英雄的行為とはほど遠い現実が克明に描かれている。⁵⁹ それに加えて上の引用箇所では、「親世代」の英雄精神に嘲笑的なまなざしをおくりながら、「われわれ」のうち誰もが感じていたことであろう「幻滅の過程」の意味づけがなされている。前線兵士の手紙を検討した際、塹壕戦を体験した者の語りが劇的に変化したこと、それによって世代間の断絶が生じたことはすでに上で述べたとおりである。このことを念頭におくと、ここで語っている「われわれ」とは前線兵士で塹壕を共に体験した戦没兵士もふくめた前線兵士のみをさし、前線から離れたところにいた司令部や銃後の知識人などは排除されていることがわかる。このようにユンガーは、現実を「事実にして」描写するとはいうものの、個人的な見解を特定の世代にまで拡大し、自身の解釈の一般的妥当性を読み手に要求しているといえよう。

それでは、レマルクの『西部戦線異常なし』が戦後精神を反映させたものであったように、ユンガーの『鋼鉄の嵐のなかで』も執筆時の 1918 年から 1919 年にかけての精神性を反映したものであったのだろうか。1918 年 11 月 3 日、キール軍港の水兵の反乱にはじまるドイツ 11 月革命によってドイツ帝国が打倒された無規範的な社会のなかで、ユンガー自身は精神の危機的状況にあったという。社会の革命的熱狂とは対照的に、負傷して帰還したユンガーは「非常に内的な孤独」を感じていた。社会の歴史的流れに取り残され、ドイツ帝国の軍事的・社会的指導層からも見捨てられた状態にあったのである。⁶⁰ こうした伝記的事実から、輝かしい戦歴にくわえ最高勲章プール・ル・メリットの最年少受章者であり、のちに保守革命の代表的論客となるユンガーの処女作『鋼鉄の嵐のなかで』初版における語りのなかにナショナリスティックな政治的主張が一切ないことの第一の理由として、ユンガーの執筆時における軍の指揮官たちへの懐疑が挙げられる。第二の理由として、公式の軍の記録から意識的に距離をとり、政治的影響から自身の戦争体験を守ることがあげられる。以上のことから、『鋼鉄の嵐のなかで』は、公式の第一次世界大戦史や統一的な連隊史などを書く余裕のあった銃後の人間とは異なるパースペクティブで描かれ自己解釈された戦争文学だといえよう。⁶¹ 換言すれば、『鋼鉄の嵐のな

⁵⁹ Vgl. ebd., S. 35f.

⁶⁰ Vgl. Kiesel, Helmut: *Ernst Jünger. Die Biographie*. München 2009, S. 138ff.

⁶¹ こうしたユンガーの描写は、ナショナリスティックなパースペクティブとは位相を異にする、個人

かで』は、戦時中に「親世代」の言葉で語られた戦争のイメージのなかに「われわれ」の姿を認めることができなかったこと、この認識のもとで再構成された戦争文学に他ならない。そして、生還した前線兵士の大半が沈黙していたなかで戦争体験を語ることは、当時の社会にたいして、きわめて断片的ではあるが別の体験としての戦争を認知させ、前線兵士の歴史的意識を創出させることに他ならない。『鋼鉄の嵐のなかで』が大半の戦争文学より九年も早くに刊行されていたことは、誰もが戦争を過去のものとして「忘れよう」としていた戦後社会の精神にたいするきわめて個人的な反抗だといえよう。

3-2. 「冷酷な耽美主義」のパースペクティヴ

このようにユンガーが『鋼鉄の嵐のなかで』で示そうとしたことは、別の体験としての戦争のイメージを「親世代」の言説に対置させ、そのイメージの傷跡を社会に認知させることであった。したがって、戦争体験を物語ることは、その文学的行為を通じていまだ認められていない歴史的意識を創出させ、新たな共同体としての共同性に読み手を参入させるものに他ならない。しかしながら、従来の戦争を意味づけるトポスがすべて無効を宣告された前線において、その物語をふたたび語ることは、きわめて困難な行為であることは想像するに難しくないだろう。

ユンガーの前線のイメージを検討するために、まず『鋼鉄の嵐のなかで』における観察者の視線からみてみよう。『鋼鉄の嵐のなかで』は、中産階級出身の将校、「突撃隊長」の視線で語られる。この視点から語られる戦場では、貴族階級の上官は背景に退き、兵士たちは多くの場合、名前が記されるだけで個性なき者として描かれている。語り手が指揮する連隊にたいしてもつねにこうした距離が保たれており、たとえ功績をたたえ

的・英雄的なパースペクティヴのもとで成立している。客観的な軍事・歴史的戦争の経過から切り離し、個人的な戦争体験の歴史がそれに置き換えられている。歴史上の第一次世界大戦史がドイツ帝国の敗北で終わるのにたいして、『鋼鉄の嵐のなかで』はその歴史的終結を無視するかたちで1918年9月に自身の功績の象徴というべきプール・ル・メリット勲章授与の描写で作品を強制的に終わらせていることは、偶然ではない。Vgl. Müller, Hans-Harald: Das Kriegserlebnis im Frühwerk Ernst Jüngers. In: *Ernst Jünger im 20. Jahrhundert*. Hrsg. v. Hans-Harald Müller u. Harro Segeberg. München 1995, S. 18-24. さらに, Vgl. Prümm Karl: *Die Literatur des Soldatischen Nationalismus der 20er Jahre(1918-1933)/ Gruppenideologie und Epochenproblematik*. Bd. 3/1. Kronberg/Taunus 1974, S. 101-118.

る場面であっても、かれらは数字で示されている。

わたしは部下の功績をたたえていいと思う。八十名足らずの中隊が長い塹壕を占領し、多くの機関銃、迫撃砲その他の兵器をものにし、二百名の捕虜を得たのである。しかし、残念なことにわれわれの損害も五十パーセントに達し、そのなかにはとりわけ多くの将校たちがいた。⁶²

部下の功績をたたえる発言にもかかわらず、皮肉なことに、兵士たちは数でしめされることによって、取り替えのきく機能的価値しかもたない存在へと成り下がったことが伝えられる。現象にたいしてこうした一定の距離感を保つ観察者の視線に特徴的な点は、物語全体を通じて現実を一切価値判断しないことである。どれほど暴力的な出来事でもそれを善や悪として迎えたり拒んだりすることはない。それよりも現象面を凝視することにアクセントが置かれ、まるでユンガー自身のライフワークであった昆虫採集をするかのように兵士の類型、戦闘の形態、陣地の変化などを血のかよわない文体のうちに刻みつける。たとえば、日常的におこなわれる戦闘がひとまずおさまリ、観察者がフランス軍の塹壕をのぞきにいったときの様子は次のように描かれている。

その前夜、塹壕の地面でまどろんだわたしは、前日に突撃をうけ今はもう誰もいないフランス軍の塹壕を通ってみた。塹壕の地面には食糧、弾薬、武器、装具、古新聞などが散乱しており、略奪をうけた古道具屋のようである。これらの間に勇敢に戦ったフランス兵の亡骸が無数に横たわっている。銃を銃眼にさしこんだまま倒れている者もいる。弾痕だらけの塹壕の壁から、挟まった胴体が飛びだしている。頭や喉が切り落とされ、赤黒く干からびた肉から白い軟骨が輝いている。それ Es は理解し難かった。その側には、青年の兵士が仰向けに倒れていた。ガラスのような目とこぶしが同方向に向かって硬直している。このようなもの問いたげな死者の目を見つめると奇妙な気持ちになる。慄き、これをわたしは戦争のあいだ一度たりと

⁶² Jünger, a.a.O., S. 486-488.

も失わなかった。この青年のそばには、かれの両腕、からっぽになった財布が転がっていた。⁶³

まず、赤と黒と白、「高貴な」戦争をしているはずであるドイツ帝国の国旗の色がイロニーニッシュに死体へと映しだされていることがわかるだろう。こうした暗黙の批判よりも、非人称の「それ Es」で描かれる死体、青年兵士、両腕そして財布との距離感をみてみよう。それらは互いに等しい距離感で配置されている。これらの間には＜無関心さ＞が全体に漂っており、いかなる差異も存在しないかのような冷たい視線で描かれている。こうした無関心さを通奏低音とするユンガーの描写は、当時の芸術の主流であった表現主義的なそれに対立し、それどころか新即物主義を先取りするものである。新即物主義は、1925 年に G・F・ハルトラウプによって開催されたマンハイム市立美術館での展覧会をきっかけに開始されたというわけではない。むしろそれ以前に芽生えていたといえるのではないのだろうか。ユンガーと同じ前線世代であったゲオルゲ・グロスやオットー・ディックスらが第一次世界大戦の傷痕を醒めた視線で否定的に描いたように、大戦の黙示録的光景を目にした若者なら誰しものが刻みつけられたシニカルな意識、これが新即物主義の審美観に他ならない。たしかにユンガーが人間的感情を排除したきわめて沈潜した視線で、「血を大量に飲み込んだ雪のうえに硬直した手が横たわり、ガラスのような目で空のほうをじっと見つめている、微動だにしない姿のまわりを囲む厳しい顔つきをした集団」⁶⁴を描くとき、新即物主義の画家たちの審美観にきわめて近いといえよう。しかしながら、次のようなイメージで死が描写されるとき、観察者のパースペクティブは新即物主義という枠組みのなかにもはや位置づけることはできない。

腹部に銃撃をうけ負傷している兵士がいた。まだ非常に若い者で、われわれのあいだに横たわり、沈みゆく太陽の温かい日差しのなかでまるで猫のように気持ちよさそうに身体を伸ばしていた。⁶⁵

⁶³ Ebd., S. 66-68.

⁶⁴ Ebd., S. 146.

⁶⁵ Ebd., S. 556.

本稿第二章で論じたように、前線兵士たちは手紙のなかで戦場の死にはまだ「厳粛さ」があるといい、かれらは人間の死だけはせめて宗教的色彩であらわしたかったにちがいない。それは「親世代」の語りにおいても同様であった。しかし、ここでの死の描写は、その悲惨さを感情に訴えかけるものでもなく、近代戦での死を宗教的色彩で偽装するものでもない。観察者は十分に対象との距離を取り、死をまえにして沈黙するのでもなく、あたかも愉しむかのような「朗らかさ」で青年の死を描きだしている。従来の美的・倫理的カテゴリーでは評価することができない死の描写がされている。こうした描写はもはや純粋な意味でのリアリズムではない。『鋼鉄の嵐のなかで』には、様々な種類の死の描写がみられるが、それは死の顔を執拗なまでに観察したときに得られる空想を愉しむ観察者の個人的な美的願望が何よりも優先されている。こうしたユンガーの審美観をボーラーの研究を念頭に置いて、＜冷酷な耽美主義＞とよぶことにする。⁶⁶ この審美観は、兵士の死を国民的再生の儀式として位置づけたナショナリストの意識とは一線を画しているといえる。『鋼鉄の嵐のなかで』の観察者は、残酷さと愉快さが絡み合った例外的なパースペクティブで描くことによって、社会にまだ認められていない大戦のイメージを再構築させる。したがって、把握できないものに含まれる破壊や死そして群集化した軍隊という非人間的なもののさえも、「驚愕のイメージ」のうちに屈折したかたちで表象されるのである。

3-3. 群集化する軍隊の三類型——煽動される群集、陶酔的群集、鋼鉄の形姿をもつ群集

こうした新即物主義と冷酷な耽美主義とのあいだを揺れうごく観察者の視線を確認し

⁶⁶ ボーラーは、ユンガーの描写を、美的モデルネの作家に共通する審美観の延長線上に位置づけ、こうした美学を「驚愕の美学」と名づけた。Vgl. Bohrer, Karl Heinz: *Ästhetik des Schreckens. Die Pessimistische Romantik und Ernst Jüngers Frühwerk*. München 1978, S. 67ff. ボーラーは本稿に関係する戦争文学の描写について、レマルクやレンとユンガーとを比較させ、次のように述べる。レマルクやレンが破壊や死の場面を描写する場合、「把握できないものが把握できるもののコンテクストのなかにとどまっている。というのも、この把握できないものは、ユンガーの描写の場合のように比喩的に「あらわれる」ことがないからである。」双方の違いをボーラーは次のようにまとめている。「ユンガーの空想は脳髓の抵抗にもかかわらず、驚愕のイメージに身を委ねることである。それに対して、レマルクは「恐怖は、たんに身をすくめている限り、耐えられる——けど、恐怖について深く考えると、だめになってしまう」ことを知っている。」Vgl. ebd., S. 145.

た上で、戦場の共同体イメージをみてみよう。まず、本稿冒頭のツヴァイクの告白を思いだしてほしい。第一次世界大戦勃発時、多くの知識人と同様にツヴァイクも、孤立した個人が「ひとつの全体」へと一体化するような熱狂を体験したと述べられていた。それは、「各人が矮小な自我を燃えたぎっている群集のなかに投げこみ、利己心から自己を浄化する」体験、つまり群集体験の告白である。これこそが「1914 年の理念」の正当性を心理的にうらづける根源的な共同体体験であった。きわめて情緒的といえる共同体への願望は、前線の同士愛や城内平和といった民族共同体の幻想と混じりあうのだが、いずれにせよ抽象的な次元で把握されていたにすぎない。こうした観念的な群集の把握を、ユンガーは戦争に幻滅するまえの前線兵士の意識になぞらえるかたちで、次のように巧みに描きだしている。

われわれは、講堂や学校の腰掛けや机から飛びだし、短い教育期間のあいだに巨大で熱狂的な身体へと、1870 年来のドイツ観念論の担い手へと溶け合った。⁶⁷

「物質主義の時代に育ち」⁶⁸ ギムナジウムを飛びだして戦地に足を踏み入れた前線兵士たちは、他者と「溶け合う」体験に全体的な意味を与えると、「ドイツ観念論」という抽象的な概念の助けをかりなければ表現のしようがなかったにちがいない。従来の戦争とは戦闘の形態や規模が異なる物量戦のなかでは、兵士の無名性や近代兵器によって、個人の武勲や身体的能力などは消え失せてしまう。しかし、こうした状況こそがかえって観察者のとらえる無名の集団、つまり群集を、具体的・身体的イメージへとさそい出す。以下では『鋼鉄の嵐のなかで』の群集像を三つの類型にわけてみてみよう。第一の〈煽動される群集〉は次のように描かれている。

塹壕を占領した後、われわれはこのような状態であった。大量の兵士が集合して塹壕のなかに入り込み、互いに大声で叫びながら一塊 *Klumpen* になって立っていた。将校が窪地の続いているほうを指さすと、その巨大な兵士の群れ *Kampfhaufen* は

⁶⁷ Jünger, a.a.O., S. 26.

⁶⁸ Ebd.

驚くべき無関心さで、ぎこちなくその方面へ雪崩れ始めた。⁶⁹

ここでは、将校と兵士、エリートと群衆という対立図式が根底にある。群衆はエリートの命令に従い、自らの意志もなくただ「雪崩れ込む」無定形な集合体として描かれている。これはル・ボンが論じたような指導者によって煽動される非理性で「自動人形」⁷⁰のような群衆像ときわめて近いといえよう。⁷¹ 銃後の知識人たちが夢みた平等な「前線の同志愛」のような言葉が不適切なほど、冷酷な視線でこの群衆は描かれている。しかしながら、エリヤスが指摘したようなエリートと群衆との絶対的距離を基本図式として『鋼鉄の嵐のなかで』における塹壕共同体が描かれているという捉え方は、⁷² 次の群衆像と突きあわせて検討すればいかに一面的な理解にすぎないことがわかる。

堰き止められていた膨大な群衆 *Masse* を眺めたとき、わたしは突破できることを確信した。予備軍も打ちやぶって、殲滅的に引き裂くことができる兵力がわれわれにあるのだろうか？ わたしはそれもできると確信していた。そのときの気分はとても奇妙で、極めて高い緊張感で満たされた。将校たちはまっすぐ立ち上がり興奮きって互いに大声で冗談を言いあっていた。何度も大きな地雷弾があまりにも近くに着弾し、教会の塔ほどの高さがある土柱ができあがり、われわれに土砂が降りかかった。しかし、だれも首さえ縮めなかった。戦闘の轟音はこれほどにまで恐ろしくなってきたので、誰も明晰な思考を備えていなかった。神経はいかなる不安をも

⁶⁹ Ebd., S. 538.

⁷⁰ ギュスターヴ・ル・ボン『群衆心理』（櫻井成夫訳、講談社学術文庫 1993 年）、35 頁。

⁷¹ たとえばル・ボンはパリ・コミュニオンで印象を刻み込まれた無定形な群衆の特徴を次のように捉えている。「意識的個性の消滅、無意識的個性の優勢、暗示と感染とによる感情や観念の同一への転換、暗示された観念をただちに行為に移そうとする傾向、これらが群衆中の個人の主要な特性である」。同上。

⁷² ノルベルト・エリヤス『ドイツ人論——文明化と暴力』（青木隆嘉訳、法政大学出版局 1996 年）、253 頁を参照。メルヒェンも、ユンガーが理想とする社会の基本的な対立図式を、エリートと群衆との対立図式であるとみなしている。Vgl. Mörchen, Helmut: *Schriftsteller in der Massengesellschaft. Zur politischen Essayistik und Publizistik Heinrich und Thomas Manns, Kurt Tucholskys und Ernst Jüngers während der Zwanziger Jahre*. Stuttgart 1973, S. 83ff.

はや知覚することができなかった。⁷³

ここでは上で指摘した煽動される群集とは異なる群集像が描かれている。将校らの声、兵士たちの熱気、これらが一体となり群集を包む空間を膨張させる。群集を包む空間は奇妙なほど「高い緊張感」で満たされている。将校という位にいる観察者は、無謀な突撃であることを頭では理解している。それにもかかわらず、かれは死への決断をもって群集へと「溶け合う」ことを待ち望んでいたかのように描かれる。この引用箇所は、第三版(1924)では、「あのとき、誰もが個人的なことを消滅させていたのを感じていたし、恐怖は消え失せていた」⁷⁴ と修正されており、個の群集への消滅が死の恐怖を克服するものとして明確にされている。個々の兵士の表情や行動が描かれることはなく、いやそれどころか群衆は目にみえる実体を備えたものとしては描かれることはない。膨れあがった群集空間が観察者を包みこみ、その境界の不明確な「われわれ」全体のなかで個々の人間を忘れさせるほどの深い陶酔が麻薬のように作用している。この身体的感覚をとおして描かれる群集像を、＜陶酔的群集＞として類型化しよう。ル・ボンやフロイトなど、近代の社会思想家に嫌悪感でもって批判されてきた個の群集への没入という事態は、逆説的にも、ここでは孤独な死から開放される唯一の契機として喜んで迎えられているといえる。

これまで観察者の知覚を手がかりに、二種類の「集合的身体 Kollektivkörper」⁷⁵ を論じてきたが、いずれもはっきりとした輪郭をもたない群集であった。それにたいして次に描かれる群集像はこれまでみてきた群集像とは位相を異にする。

兵士たちは石のように微動だにせず in steinerner Unbeweglichkeit 銃を片手に塹壕の斜面に立ち、前地を監視している。時折、照明弾の光によって鉄兜がびっしりと Stahlhelm an Stahlhelm、そして銃剣が隙間なく Seitengewehr an Seitengewehr 照らされるのをみた。わたしは、おそらく粉々に碎け散ろうとも克服することがで

⁷³ Jünger, a.a.O., S. 516-518.

⁷⁴ Ebd., S. 517.

⁷⁵ Martus, Steffen: *Ernst Jünger*. Stuttgart/Weimar 2001, S. 28.

きるという誇らしい気持ちに満たされた。⁷⁶

これまで論じてきた群集像は強弱の差はあれ、いずれも群集の語源的意味に近い「無定形な何か」⁷⁷ あったといえよう。それとは対照的に、ここで述べられている群集は、はっきりとした輪郭をそなえ、「石のように微動だにせず」起立しているイメージで描かれている。またこの光景が近代技術を媒介としてうつしだされていることも看過してはならない。暗闇のなか、照明弾によって「鉄兜」の海が照らしだされた光景に「誇らしい気持ち」をおぼえる観察者は、たとえナショナリスティックなイデオロギーを主張することはなくとも、いや、そうした主張がないがゆえに純粋な意味でブレ・ファシスト的な美学に魅了されているといえよう。こうした冷酷な耽美主義に基づく視線で描かれる群集は、個人の死を無意味なものにする物量戦にたいして、個人で挑んでいるのではなく＜鋼鉄の形姿をもつ群集＞とともに対峙しているという幻想へと観察者をいざなう。さらに、この「鉄兜」の海のなかで捉えられた群集像と同様の前線兵士の表情は、次のような不気味さをたたえている。

鉄兜に縁どられた微動だにしない顔 unbewegliche Gesicht、前線の騒音を伴奏にして発せられる単調な声 die monotone, vom Lärm der Front begleitete Stimme は、不気味な真面目さという印象をあたえていた。ありとあらゆる驚愕を絶望にいたるまで味わいつくし、いかなることにも動揺しなくなったという感覚だ。男性的で極端な無関心 eine große und mänliche Gleichgültigkeit の他にはなにも残っていないように思われた。⁷⁸

こうした兵士の外見には、煽動される群集や陶醉の群集に特徴的にみられたような溶け

⁷⁶ Jünger, a.a.O., S. 222.

⁷⁷ 「群集 Masse」を語源的にみると、ラテン語の massa という語に由来し、これは「ねんど Klumpen」や「パンの生地 Teig」を意味している。つまり、群集とは、観察者の捉えかたによってそのイメージが変化する「無定形な何か」であるといえよう。Vgl. „Masse“. In: *Wörterbuch der Philosophischen Begriffe*. Hrsg. v. Johannes Hoffmeister. Hamburg 1959, S. 393.

⁷⁸ Jünger, a.a.O., S. 206-208.

合うことを誘うアウラはない。ここで観察されているのは、接触を極端に避け、厳格な規律を形態にうつしだした甲冑のような兵士の類型である。観察者は、群集の語源的意味である「無定形な何か」のなかにある形態を読み込もうとしていることがわかる。兵士の類型は、観念的につくりだされるのではなく、現実を凝視したさきにあらわれている。観察者が見ているのは、現存する兵士の類型ではなく、現象の奥深くでみえるなんらかの＜普遍的な形姿＞にちがいない。

作者であるユンガーが規律ある軍隊の理想を他にもちながらも、どれほど意識的に軍隊の群集化という事態をとらえていたのかは不明である。とはいえ、観察者は、非人間的な戦争のなかで、＜煽動される群集＞、＜陶醉の群集＞そして＜鋼鉄の形姿をもつ群集＞という三つの群集の類型をみいだしたのである。とりわけ＜鋼鉄の形姿をもつ群集＞が、物量戦に耐えぬだけの兵士の模範的英雄像と重ねあわされるとき、そのなかに前線兵士のアーキタイプなるものをユンガーは読み込もうとしているのではないのだろうか。

3-4. 敵を憎むことなく殺す——決断主義的英雄像に代わる「機能エリート」としての英雄像

こうした前線兵士のアーキタイプなるものを念頭に置いて、次にユンガーの英雄像を検討してみよう。前線兵士の手紙を論じた際に、「親世代」の言説によって形成された英雄像が虚妄であることは明らかであったが、前線兵士たちは代わりとなるいかなる英雄像も語れなかったことはすでに指摘したとおりである。たしかにユンガーも「幻滅の過程」を語るとき、「汚れ、労働、そしていくつもの眠れぬ夜」が塹壕生活を待ち受けていたと悲観的に述べていた。このように現実を批判的に描写するにもかかわらず、『鋼鉄の嵐のなかで』では、従来のロマン主義的英雄像と異なる新たなイメージが積極的に描かれている。

この英雄像を示すまえに、その成立条件を指摘しよう。それは、＜敵の不可視＞である。派手な戦闘行為を期待していたユンガーにとって初めての戦場となったレ・ゼ・パルジュは、「重要な戦闘行為に参加したのであったが、敵ひとり目にするとはなかつ

た」⁷⁹と述べられている。それもそのはずで、近代技術が導入された歴史上初めての戦場は、毒ガス、砲撃、炎、白煙があたりを包みこんでいたのである。

戦争はその爪をむきだし、心地よい仮面を剥ぎとった。戦争はそれほどに謎めいて、非人間的だった。そうした折には敵のこと、この不気味で危険をひめた存在がどこか背後にいることなど考えることはほとんどなかった。このことは完全に経験の枠外にある出来事だったので、これほどまでに強い印象を刻みつけ、連関を把握するのに苦労した。それは白昼にみる亡霊の姿のようだった。⁸⁰

騎士道精神が根づいていた戦場では、敵のことを、身体を備えた存在とみなして決闘することが可能であっただろう。しかし物量戦のなかでは、不可視という条件のもとでそれぞれ戦わなければならない。敵が視野にはいったとしても、照明弾や白煙などの近代技術のうみだした幻想的な光景のなかでは、「経験の枠外」であるため、現実よりも夢でみる光景のほうが近いように記述されざるをえない。「突撃の波が幽霊の列のように白い爆煙のなかを踊っていた。」⁸¹ このように知覚される戦場では、伝統的な戦争の根本にある敵を尊重することそれ自体が不可能となる。なぜなら、物量戦では「お互いを見ることなく殺しあった」⁸² のだから。人・物・情報が総動員されたはずの物量戦の戦場は、いかなる体験も不可能に思わせるほど「混沌して空っぽの状態 *die chaotische Leere*」⁸³であった。このように告白されている敵の不可視性こそが、第一次世界大戦の根源的な体験だといえよう。

それでは、近代技術がつくりだす全面的に不可視でスペクタクルな光景のなかから、いかなる英雄像が見だすことができるというのだろうか。群集化した軍隊の異なる三つの類型が存在していたのと同様に、『鋼鉄の嵐のなかで』で描かれる英雄像もまた統一性がない。まず、第一の英雄像についてユンガーは次のように述べる。

⁷⁹ Ebd., S. 86.

⁸⁰ Ebd., S. 30.

⁸¹ Ebd., S. 520.

⁸² Ebd., S. 480.

⁸³ Ebd., S. 86.

現代の歩兵戦は、歩兵の集合体を虐殺する興味をひかないものに成り下がったという間違った見解をしばしば耳にする。しかしそうではなく、今日では、以前にもまして個人が決定づけるのである。かれらの王国でその姿を目にしたものなら誰もが知っている。塹壕の領主たちが厳しく決心した顔つきで、向う見ずでそれほどまでに果敢に、機敏に前方後方に飛び回り、鋭く血に飢えた目であることを、かれらがいかなる報告でも言及されることのない英雄 *Helden, die kein Bericht nennt* であることを。⁸⁴

『鋼鉄の嵐のなかで』に記述されている戦場とは、ほとんどの場合、近代兵器による人間の虐殺の舞台であり、いかなる英雄像も霞んでしまう光景であったはずである。それにもかかわらず、ここではアナクロニズムともいえる「個人が決定づける」戦争観が表明されている。こうした解釈には、ユンガー自身もまだ時代にそぐわない傭兵的ロマン主義を回顧しているという点で、ペシミスティックな文明批判から抜けだせていないといえよう。この種の英雄は、戦場で自らの価値を証明しようとする。突撃の際には、兵士に宿っている「攻撃精神 *Angriffsgeist*」と「無鉄砲な精神 *Draufgängertum*」⁸⁵によって、それこそ戦闘をあたかも冒険のように果敢にこなす。ユンガー自身がこのように解釈したい英雄像は、ミュラーのいうようにユンガーが夢みた「1914 年のアナキー的・英雄的生のプラン」⁸⁶にもとづいて描かれているといえよう。この英雄像は、生と死をわかつ根源的な決定にたつことを追い求め、こうした実存的瞬間にアクセントが置かれて描かれる。

突撃の三分前に、わたしの従卒をしていた忠実なフィンケが合図して、酒がいっぱい入った水筒を渡してくれた。かれの単純な理解で、わたしは焦眉の急であることを知った。あたかも水をのむように、わたしはそれをいっきに飲んだ。さあ、突撃

⁸⁴ Ebd., S. 484.

⁸⁵ Ebd., S. 528.

⁸⁶ Müller, *Der Krieg und die Schriftsteller*; S. 228.

のための葉巻も忘れてはならない。風のせいで三度もマッチの火が消えた。

素晴らしい瞬間がやってきた。弾幕射撃が一番手前の敵の塹壕あたりにたちこめた。われわれは前へと進んだ。

血にたいする飢え、熱狂そして酔いが入り混じった気分で、われわれは敵の陣地を目指して進軍した。わたしは中隊の前方におり、後ろには従卒のフィンケと初年兵を従えていた。右手にピストルを握り左手には竹の乗馬鞭を握っていた。わたしは訳もない怒りに襲われていた。殺したいという思いに圧倒され、わたしは歩みを早めた。熱狂のあまりわたしの目からひどく涙がこぼれた。

途方もない破壊の意志が戦場にのしかかり、脳髄のなかで凝縮していた。ルネッサンスの人間もこのように激情にかられ、かのチェリーニも我を忘れて暴れたのだろう。狼男も血を吸うために闇夜を吠えながら走りまわるのだろう。⁸⁷

市民社会で教育を受けた者は肉体的暴力を行使することに慣れていないため、アルコールなどにたより高揚を誘いださなければ「殺したいという思い」に身をゆだねることは到底できない。こうした感情と行動を一致させるのに苦しむがゆえに、「訳もわからない怒り」に襲われ、「涙がこぼれ」る前線兵士の意識を、語りは的確にとらえている。さらに、この英雄像はプロイセンの将校の道徳や祖国のために戦うという国民戦争の理念のために戦っているのではない。そうではなくて、ここで理想的に描かれているのは、残酷な個人的快樂をもとめる決断主義的英雄の姿である。

しかしながら第一次世界大戦では、こうした「偉大な」突撃の瞬間はめったにおとずれず、塹壕で待機している期間に比べるとはるかに短かった。塹壕のなかで待機し長期間にわたって集中砲火にさらされ、それに耐えぬく英雄像が描かれるとき、この決断主義的英雄から異なる相貌がさらけだされる。目にみえない敵の攻撃にさらされながらも、持ち場を去ろうとしない前線兵士についてユンガーは次のように問いかける。

なぜきみは飛びだして闇夜のなかに消え、安全な草むらのなかまで走り獣のように

⁸⁷ Jünger, a.a.O., S. 518-520.

倒れこまないのか？ なぜきみも戦友も依然として耐えているのか？ だが、誰かがきみを監視している。きみ自身はおそらく意識していないだろうが、きみのなかの道徳的な人間が影響を与えており、二つの強力な要因が君を縛っている。それは義務と名誉だ。⁸⁸

こうした耐える兵士の「義務と名誉」を賞賛する語りを、ありもしない道徳性をあがめ国のためにつくすよう呼びかけるイデオロギーだと批判することはたやすい。しかし、これまで論じてきたように『鋼鉄の嵐のなかで』の語りはナショナルスティックな意味づけなしに第一次世界大戦世界大戦を描写していた。そこでは、まず、「新しい戦争の形式に適合しなければならない。指揮、歩兵、連絡師団と軍団とのあらゆる連携はすさまじい炎によって機能を麻痺していた」⁸⁹ と正確に見抜いていたこと、さらに、前線を理解しない司令部に対する批判を抑えることがなかったことを念頭に置いてみよう。そうすると次のことが浮かび上がる。この箇所では、「新しい戦争の形式に適合」し、物量戦に耐えることができる新しい英雄像が探し求められているのである——「誰かがきみを監視している」という語りの視線とともに。レマルクなら物量戦を破壊が繰り返えされるだけの無意味な戦闘して捉えていたであろう。それにたいして、ここでは耐える兵士を試すような語りが挿入されることで、近代戦の背後には、つねにく権力の目>が監視していることが露呈される。しばしば論じられる戦争と教育の関係についてユンガーがどこまで意識的であったかどうかはひとまず置いておく。いずれにせよ、未曾有の技術が導入された物量戦・塹壕戦がもたらす破壊のなかで冷静沈着にみずからの任務をただまっとうするだけの兵士がいるかどうか、権力の目をしたこの語りは選別しようとしているのである。したがって、国や司令部のために服従するのが問題ではなく、ただ服従すること、これを「名誉」とする試練を前線兵士に課している。全面的に不可視の戦場で、敵との関係が欠如している以上、この状況で持ち場を離れず戦いぬく英雄には次のことが真実として響くだろう。それは、<敵を憎むことなく殺す>ということである。「親世代」がしきりに叫んでいた国民戦争のイデオロギー的側面、敵にたいする憎悪を

⁸⁸ Ebd., S. 388.

⁸⁹ Ebd., S. 240.

よびおこすプロパガンダは、もはやお払い箱となる。この英雄は、「爱国心」や「祖国」といったナショナルな目的をぬきにして、集中砲火のなかで、冷静に敵をただ憎むことなく殺すことのできる人間である。⁹⁰ したがって矛盾した表現かもしれないが、ここで描かれる英雄とは「機能エリート」⁹¹ を意味するのである。これが第二の英雄像である。作者であるユンガーは、「敵を尊重すること」を理想的な戦争として語っていたが、⁹² ここでさらけだされた「機能エリート」という英雄像を念頭に考えると、次の光景はグロテスクなものにしかうつらない。

頭上を見上げると、シュラーデル少尉のこわばった表情が目についた。少尉は機械のように銃弾を撃ってはこめて、撃ってはこめてを繰り返していた。緊張がほどけ、わたしたちはオルレアン処女の塔の場面を思い出すといったおしゃべりをした。ところが、わたしはそれほどユーモアのある気分にはなれなかった。というのも、はっきりとした認識というものを失っていたからである。⁹³

自らが負傷して銃弾が飛び交うなかで、シラーの『オルレアンの処女』の場面を想起させるほど余裕があったのかどうかは少々疑問だが、異質な描写がされていることに気づかされるだろう。シュラーデル少尉は二つの動作をくりかえす「機械のように」描かれおり、そこには「高貴さ」といった精神的要素は欠落している。騎士道精神が息づいていたシラーの作品を想起するという会話を挿入させることで、物象化された兵士の姿が、

⁹⁰ ジーフエルレは、ユンガーが兵士のタイプを二つにわけて描写していることを指摘している。ひとつは、傭兵型の兵士でロマン主義的戦場においてあらわれる旧世代の英雄である。もうひとつは塹壕戦を耐えぬく労働者型の兵士である。この兵士は「本能と機械の正確な結合」であり、絶望や悲観もなく、そして、いかなる目的もたずに高度な単純作業の過程を能動的にこなす人間類型である。

Vgl. Siefert, Rolf Peter: *Die konservative Revolution. Fünf biographische Skizzen*. Frankfurt am Main 1995, S. 137f.

⁹¹ Müller, Das Kriegserlebnis im Frühwerk Ernst Jünger. In: *Ernst Jünger im 20. Jahrhundert*, S. 23.

⁹² ユンガー自身が理想とする戦争とは次のようなものである。「戦争のなかには常にわたしの理想があり、それは敵をいかなる憎悪の感情もなく、ただ戦闘においてそのようなものとしてみなすこと、そして敵を男としてかれの勇氣に応じて評価することである。」Jünger, a.a.O., S. 134. このように<解釈>する理想は、ユンガー自身の<記述>によって歪められて描かれているといえよう。

⁹³ Ebd., S. 628.

まるでロボットのように単純動作をくりかえすだけのグロテスクなものとして描かれている。近代戦の行き着くところは、国家理性のはたらく余地がないほどの暴力のエスカレートがおこなわれる物量戦であり、そのなかの英雄は敵を憎むことなく殺す「機能エリート」へと変貌する。これこそが、ユンガー自身の＜理想＞とは裏腹に、描きだされている前線の新たな現実に他ならない。

第一次世界大戦から年月を隔てた 1944 年、アドルノは、ベンヤミンの前線兵士たちの沈黙についての発言を反復する語り口でこう述べた。第一次世界大戦において初めて、「人間の肉体が物量戦に適していないために本当の経験というものが不可能になった」⁹⁴と。これまで論じてきたように、たしかに第一次世界大戦の語りは「真実」をめぐるものではなかった。それはヴァイマル末期の政治的権力闘争にはかならず、その次元で論議されていたにすぎない。だが、近代戦の行き着く先をアドルノが次のように述べたとき、いかにユンガーのイメージと近いものを認識していたことがわかるだろう。

しかも、悪魔的なことであるが、ある意味では古い型の戦争以上に人間の主導権が求められているのであり、いわば主体喪失を引き起こすために主体の全エネルギーが費やされているのだ。エドワード・グレイが望んだ憎しみなき戦争という人道的な夢は、まったくの非人間性に達したこの戦争で実現されているのである。⁹⁵

これは第二次世界大戦について語られたものだが、グレイがユートピアとして期待していた「憎しみなき戦争」は、第一次世界大戦によってすでにディストピアへと変貌していたといつてよい。それは、敵の不可視という戦場の条件のもとで、全面的に服従するという主体性を喪失した兵士たちが繰り返る戦争の延長線上にある。「混沌とした空っぽの状態」とユンガーが表現した戦場で、人間のすがたはもはや目にうつらない。主体性を喪失した＜鋼鉄の形姿をした群衆＞あるいは「機能エリート」は、ナチズムの褐色の制服をきた軍隊へといきつくのであろうか。そのことを 1920 年のユンガーは知る由

⁹⁴ Adorno, W. Theodor: *Minima Moralia. Reflexionen aus dem beschädigten Leben*. In: *Theodor W. Adorno Gesammelte Schriften*. Bd. 4. Hrsg. v. Rolf Tiedemann. Frankfurt am Main 1980, S. 60.

⁹⁵ Ebd., S. 61.

もなかっただろう。

おわりに

本稿は、前線兵士の沈黙の背景にある問題と、文学という形式をかりて体験を語ることへの挑戦について考察してきた。近代技術をもちいた歴史上初めての戦争のなかでの破壊や死をみたとき、かれらの知覚は経験したこともない出来事に対応できず、いかなる感情も慣れ親しんだカテゴリーで語ることもできないがゆえに市民社会の言語体系への幻滅すら感じていた。ここに「親世代」と前線世代との断絶がみてとれた。またその幻滅した状況のなかで、大戦勃発時に「親世代」の言説がかれらの語りを支配し、美化された戦争を語らせていたことの批判的認識、さらに、「親世代」の言説から逃れようとして<ぎこちない>言語で体験を語ることへの挑戦が芽生えていた。この萌芽をユンガーは、戦争文学『鋼鉄の嵐のなかで』のなかで、前線兵士である「われわれ」の体験を認めさせる試みとして捉えていたのである。それは、歴史的・社会的記憶とは異なる、別の体験としての戦争の記憶に共同性の意味をあたえ歴史化する試みに他ならない。たしかに、ユンガーの語りは「親世代」の戦争の言説を一掃するような激烈な批判がみてとれた。しかしながら、そのイメージを確認すると、それ自体が現実と幻想で揺れ動くものであるがゆえに、きわめて危険なものでもある。現象のなかに残酷なイメージを愉しみながら読み込もうとする「冷酷な耽美主義」のパースペクティヴは、プレ・ファシスト的な審美観ときわめて接近していることがわかる。残酷なまでに非人間的な「鋼鉄の形姿をもつ群集」と「機能エリート」という新たな英雄のイメージのなかに、作者であるユンガーが端からナショナリスティックな主張を付与したのではないが、そこから、歴史を振りかえるわれわれにとっては後におとずれるカタストロフィが脳裏によぎるのである。しかしながらこうした残酷を愉しむユンガーの想像は、国民戦争を終わらなき暴力へと変貌させた物量戦が行き着く先である「憎しみなき戦争」についての認識を誤ることはなかったのである。